

百日紅の花揺れて

—妻を亡くすということ—

水谷
美澄

青山ライフ出版



カバー・本文挿絵 水谷美澄
装幀 溝上なおこ



目次

はじめに	6
あまりにも早く	16
胸の大きな穴	26
百日紅の花揺れて	34
車窓の景色が滲んで	42
今日ご飯いらないよ	48
慰めてくれた歌声	56
再婚?	62
アルバム	68
癒され欲	74
形見	86
新しい家	94

複雑性悲嘆	102
家の灯り	110
一人旅ができない	116
お墓参り	124
カラオケ	130
半分こ	136
年賀欠礼	142
兼業主夫	148
保険のこと	154
そして今	158
おわりに	162

はじめに

いつものように朝が来て、一日はあっという間に過ぎてしまいます。そしてまた夜が明け、次の一日が始まり、気がつくともう空には星が瞬いています。そんな毎日がずーっと続いて、振り返れば妻を亡くしてからいつのまにか十五年の歳月が流れてしまいました。十五年といえば相当長い年月です。十五年あれば子供が小学校に入り、中学高校を経て大学三年生になります。思えば私はこの長い年月をずっと今日まで、悲しみと痛み、喪失感、孤独感のなかにいました。感情的には、自分はクールでドライなほうだと思っていました。が、実際には意外なほどにウェットで、思っていた以上に落ち込んでしまったのです。妻を亡くした瞬間から、心はどこかに失くしてしまい、無感動になり、恐らく無表情になって、日々何にもしたくないという状態が続きました。

そして定年を迎えました。勤続三十七年、ただひたすら真面目に働いてきました。社会に役立ちたいという至極純粋な気持ちと、大学卒業の時にはもう結婚を約束していましたから、安定した仕事につきたいという気持ちとで入社しました。在職中はいい加減な仕事はしてこなかったつもりです。上司に取り入るほどの器用さは持ちあわせていませんし、そういうことが大嫌いな性格です。担当となった仕事をただ一生懸命にやってきました。仕事に打ち込むことで、妻を亡くしたことから遠ざかりたい気持ちもありました。そうやってなんとか定年まで勤めあげることが出来ました。それまでの上司や仲間のお蔭と思っています。人並みに退職金を頂き、厚生年金も報酬比例部分が支給出来ます。節約すれば、年金と今までの蓄えとで何とか暮らしていけそうです。

息子も娘も仕事を持っていますし、既に二人とも家を出ました。母は昨年から介護施設にお世話になっています。ですから、いま私はまったくの一人暮らしになっています。毎日がいわゆる悠々自適という状態です。何か不満があるわけでもなく、何の不自由もなく、今の

ところこれといって不安もない生活です。

しかし妻を失ったあの日以来、それまでの愛情に満ちたこの素晴らしい世界は、総天然色から総てのものが色を失い、モノクロームの世界に変わってしまいました。私の時間はそこで停止したままになっています。いまから思えば、それまでは幸福の絶頂にいたのです。愛情にあふれた日々、世界のどこかで戦乱があらうと、日本のどこかで災害があらうと、個人的な意味では愛する妻と子供達と共に、平凡でも幸せな充実した時を過ごしていました。出世欲が強い人間でもなく、金の亡者でもなく、色に狂うわけでもなく、ごく普通の毎日でしたがとても満たされていました。妻とは大学時代からの恋愛結婚で、優しく賢い女性で、何より私の考え方や性格を理解してくれる人でした。私は彼女をとても愛していました。

妻と結婚して二十一年目の平和な生活の中での、突然の死別でした。癌と告げられて、わずか十八日で亡くなってしまったのです。妻であり、恋人であり、人生の戦友であり、飲み友達でもあり、私の生きる力の源である存在が突然いなくなつた心の痛手は大きく、ただた

だ茫然自失の状態となつてしまいました。朝目を覚ますこと、それすらが厭でした。目を開けた瞬間から淋しく、悲しい一日が始まるのですから。

一年間、毎日涙が止まりませんでした。おそらく普通の人生であれば一生かかっても出ないくらい涙が流れたと思います。すぐそばで私を見ていたら、みっともないくらいに泣いていたことでしょう。子供が起きている間は気が張っていましたが、みんなが眠った後は、我慢しきれなくなつて涙を流していました。思い出そうとしなくても、目を閉じると妻の笑顔が浮かび、あらためて今までがどんなに幸せな日々であつたかを思い知りました。

これまで、馬鹿がつくほど真面目に働いてきて、なにか悪いことをしたわけではありません。どうしてこんな目に遭うのかと身の不幸を恨みました。妻を亡くすということは、世の中にはいくらでもある事です。しかし、最愛の者を失くすということが、こんなにも自分から全ての力を奪つてしまうとは思いませんでした。

妻を思い出すと悲しく辛いので、つとめて考えないようにしていました。しかしどんなに

頭のなかで妻を振り払っても、胸の中はいつも悲しみでいっぱいになっているのです。それは妻の死から十五年を過ぎても変わりません。自分自身ではどうにも出来ないのです。いつかはこの痛み悲しみは薄らいでいくだろう。それまでは、ただ耐えるしかないのだと自分に言い聞かせてきました。

何年か前になりますが、確かNHKのテレビ番組で、ヒット曲の誕生秘話をとりあげたものがありました。その中で『涙そうそう』についてのエピソードがありました。私は森山良子さんの詩にビギンが曲を付けたものと思っていたのですが、実際は逆で、ビギンの曲が先に出来ていて、それを森山さん贈ったものでした。その曲の仮タイトルが『涙そうそう』だったそうです。沖繩出身ではない森山さんが、どうしてこのタイトルを使ったのか疑問だったのが解せました。森山さんはタイトルの意味を聞いた時に、若くして亡くなったお兄様のことを詞にしようという気持ちがあったそうです。それまで、優しくて大好きだった兄への想いを、何時か何かの形にしたいと考えていたのが、涙そうそうの意味を聞いた時、そうだこ